世界を喰らって

色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を喰らって

【Ｎコード】
Ｎ５６５２Ｐ

【作者名】
色

【あらすじ】
死んだと思っていたのに体がある・・・？
なぜか始まってしまっていた二度目の生。
これまでとは全く違う体を与えられ、
今まで知らなかった世界で生きていく・・・

プロローグ（前書き）

作者は愚か者です。
これが処女作となるのでバカバカしい作品になってしまうかもしれません。
設定は基本思いつきですが
長続きするように頑張るのでよろしくお願いします。

プロローグ

「俺」は・・・何だ・・・？

「俺」は・・・あの時
あの瞬間に死んだはずだった

何故・・・存在している？
何故・・・此処にいる？
何故・・・体が動いている？
何故・・・意識がはっきりしない？
何故・・・腹が減る？

何故・・・・・・こんなにも腹が減っている？

◆

喰らえ・・・・・・

何だ？

喰らえ・・・・・

俺が？

喰らえ・・・・

何を？

喰らえ・・・

何故？

喰らえ・

ああ・・・

喰らえ

もう・・・

どうでもいい・・・

喰らえ！！

全て・・・

喰らいつくしてしまえ・・・・・・

設定

プロローグではどんな作品になるのかよく分からないと思うので主人公の一応の設定をつけておきます。

主人公

名前

性別　男

容姿　黒髪黒目
身長　約１７０ｃｍ　体重　約６０ｋｇ
顔は中の上～上の中あたり
基本的に顔は勝手に想像してください

性格　基本的には傍観者であろうとするが、面白そうなことには自分から参加する。
人によって冷たくも優しくもなるが、基本的には相手次第。
よくぼーっとしているが、案外周りは見ている・・・たぶん。
かるくＳの思考が入ってきます。

もとは人生にこれといった山もなく谷もなかった高校生。
学校からの下校中に通り魔に刺されて死亡。
もともと「死んでみたい」などと考えていたので自分が死んだことに関してはあまり考えない。

自分が刺されて意識が薄れていったことまでは覚えていたが、気がついた時には何故かアラガミの体（シオではない特異点、しかも終末捕食間近）に憑依していた。
ちなみに「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」はプレイ済みで「ネギま」はほとんど知識なし。

世界

ゲーム「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」とは違った末路をたどったひとつの世界・・・ではなく、かなり過去の地球からスタート。主人公の終末捕食で恐竜絶滅（笑）。そして長く眠ってる間に人類誕生。原作の１０００年と数１００年ほど前に再び目覚めて…

という感じにしていきます。

設定（後書き）

「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」豆知識

アラガミ

考えて喰らう細胞である「オラクル細胞」の集合体で、一体に一つのコアによって細胞を統率している。
あらゆるものを捕食し、変化を遂げた。

ノヴァ

地球を喰らうアラガミ
特異点のコアを元としている
ゲームではシオによって月へと飛んで行った

終末捕食

地球全体を飲み込むほどに成長したアラガミ「ノヴァ」によっておこされる人類の終末理論
地球再生のエコシステムであり、地球上の存在をアラガミによって喰らい、一度一つにした上で、生命力を再分配する現象。
恐竜の絶滅など過去繰り返された大絶滅にも関わりがあると考えられている。

第一話（前書き）

進まない・・・（泣）
描写は次々と浮かんでくるのに・・・

それはそうと一話目です。
進みは遅くなりそうですが、どうぞ。

第一話

喰らう・・・・・

ありとあらゆるモノを

喰らう・・・・

まだ足りない

喰らう・・・

より多くを喰らうために体を変える

喰らう・・

もう、どうやって食べているのか分からない

喰らう・

いつまで喰らえばいいのだろう・・・・・・

喰らう　・・・・・・・・・・・・・・・・・

◆

自分の意識が少しずつ戻ってくる。
どうやら全てを食べ尽くしたようだ。今、この世界には自分以外何も存在しない。

これからどうすればいい・・・・・・？

それは己の体が知っている・・・。

「喰らったモノ」を分配していく。そして再び生命にこの大地を覆わせる。

そうすれば「この体」の役目は終わりだ・・・

でも・・・

まだ「俺」は消えるつもりはない。

「俺」が何をしているのか、どんな状況なのかはもう理解した。

「ノヴァの終末捕食」

星の全ての生命を喰らい、リセットした後、それを再分配していく作用。

なぜ「俺」がそんなことになっているかは知らないし、知るつもりもない。

どうせ憑依やら転生やらといった所だろう。「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」の世界にいて、アラガミになっているのはわけがわからんが・・・

まあ、せっかく二度目の生を送ることができるというのにすぐに消えてしまうのはもったいない。もったいなさすぎる。

己の命まで分配はしない。これは決定だ。

絶対に次の生命が、知識を持ったヒトが現れるまで生き残ってやる。

ああ、また意識が薄れてゆく・・・

仕方がない。眠ろう・・・

新たな生命が生まれてくるまで。
「俺」が楽しめる世界がやってくるまで。
願わくば　その世界に「俺」という独立した存在があらんことを・・
・・・・

第二話（前書き）

時間は飛びます。
これからもなんどでも・・・たぶん
ま、そこんところはおいといて・・・どうぞ。

第二話

大地が揺れた・・・・・

ん・・・？何が起こっている？

体が揺り動かされる・・・・

ああ、「俺」は生き残ることができたのか・・・・・・

◆

「俺」の意識がはっきりしてくるのがわかる。体があると分かったのでどうやら「俺」という個は生き残ることができたようだ。もとになっているノヴァは知らないが。

自分の体を動かそうと試みてみる・・・・・・が、動かない。

何故か全身が圧迫されている。推測してみると、どうやら「俺」の体は地下に埋まってしまっているようだ。

いったいあれからどれだけの時が流れたのだろう？
もう、ヒトは現れたのだろうか・・・

・・・それはともかく、まずは起き上がって自分の周りがどうなっているのか確かめなくてはいけない。

◆

カッ！！

光る何かが大地をえぐってきた。とてつもなく強大なエネルギーが自分の体を包み込む。

体を構成しているオラクル細胞はこの程度では崩壊しないが・・・
あれ？

少し右半身が欠けたっぽい。直しとかないと・・・・・・
それはともかく　痛い、とにかく痛い。これまで感じたことがないような痛みだ。
この体、頑丈で傷ついたり壊れたりすることはほとんど無いみたいだが、痛覚はしっかりと存在しているようだ。体に痛みがはっきりと伝わってくる。生前だったら発狂していたか、気を失っていただろう。

先ほどの強大なエネルギーが突っ込んできた方を見ると光が差し込んできている。そちらが地上なんだろうが・・・・・・遠い。結構な太さのがえぐってきたたのに、外の光が小さく見える。

ほんと、どれだけ眠っていたんだろう、俺。自分の上にこんなに何かが積もっているのに・・・
ってか、それをえぐってくるだけのエネルギーってどんなだよ・・・・・・

いろいろと考えている間に自分が服を着ていない素っ裸な状態であることに気がついた。

あー、そりゃ服なんてあるわけないよなぁ。終末捕食の後ずっとこのままだったんだし。でも、だからといってこのままでもまずいだろうし・・・
体内のオラクル細胞でつくってみるか？体を作りかえることは終末

捕食の時にやったからなんとなく覚えてるし。

自分の細胞をいくつか取り出してそれらしい形に整えていく。細かい細工はできないが一応の形にはなる。

少ししてズボンらしきものとローブらしきものが完成し、それを自分の体に身につける。

◆

「さて、それじゃあ　今の世界はどうなっているのか見に行ってみるかねぇ。」

そう呟いて先ほどできた太い穴を駆け上っていく。その顔には笑みが張り付き、好奇心に満ちあふれているようだった。

ノヴァは再び目覚め、世界に現れる。

その先に待っているものは、はたして・・・・・・

第二話（後書き）

クロス先をだいたい決定しました。
たぶん次の話で分かると思います。

第三話

穴から這い上がる。

長らく目にしていなかった空は、やや暗く雲に覆われていた。

周りを見渡してみると、数十人ほどなヒトが視界に入りきらないほど大きい一体の鬼（鬼神？）と戦っている。戦いの被害は相当なもののようで、戦闘不能となったヒトが辺りにたくさん転がっている。形の整っているのもあるが、ほとんどが肉体の一部や大半を失ったただの肉片となってしまっていた。それらから、巨大な鬼の強大な力を見て取ることができる。

ヒトがたくさん死んでいるのにこれといって嫌な感じはしない。アラガミの感性に近くなっているのだろうか？

自分を目覚めさせる原因となったあのエネルギーの塊もこいつが放ったものだろう。そこら中に似たような穴があいていた。

これはどうするべきだろうか・・・

まだ、何も俺の存在に気がついていないらしい。

◆

鬼もヒトも互いの相手に忙しいようだ。

鬼は二つの顔、そして四本の腕と脚をもっており、その腕を使ってヒトを薙払い、たまにエネルギーの塊を放射している。体中に傷がついているが、ほとんどダメージになっているわけではないらしい。

それに対しているヒトは、古風の衣類を身に纏い、ある者は剣や槍、弓といった武器を持ち、また、ある者は札のような者を持っていた。武器を持つ者は、現代人が見たら「本当に人間か？」というような動きで鬼に傷を与えていく。
そして札を持っている者は、何かを唱えて札から炎や水流を作り出したり、結界のようなもので仲間の身を守ったりしていた。
それぞれが協力しあい、鬼に傷を与えていってはいるが、ダメージは少しずつしか溜まっていっていない。

こりゃあ、まだまだ長引いていくんじゃねえか？
・・・ってか、あれってたぶん陰陽師だよな？まさか、これから俺が知っているような歴史が始まっていくことはないよな・・・？
確かに「ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ」のデータベースに恐竜の絶滅の一説に終末捕食がある、って書いてあったような気がするけどさ・・・。
おれの起こした終末捕食がそれかもしれないとは・・・・・・

憂鬱な気分になっていくが、まだ戦いは続いている。ヒトは、攻撃をかいくぐり、剣で、槍で、炎で鬼にダメージを与えていくが、鬼の理不尽な程の強力な攻撃によりヒトは少しずつ人数を削られていく。

ヒトの手伝いに・・・・・・っていうか、アラガミらしくあの鬼でも喰らいにいくか？
せっかくヒトを見つけられたのに見殺しってのもあれだし、自分の力もたしかめたいし。

戦いの中に突っ込んでいくことを決め、どうやって喰らうかを考える。

・・・とりあえず武器は必要だろうと考え、片手から神機のようなものを作り出す。自分の体長ほどの大きさの黒ずんだ刃を持つ片刃の大剣だ。斬撃を飛ばすようにオラクル細胞から作り出したバレットを放てるように作ったので、近、中距離で自由に戦うことができる。

己の思考を少しずつ本能が蝕んでいく。
まあ、細かいことはなんとかなるだろう。考えることを中断し、黒い刃を片手に戦いの場へと突撃する。

◆

「やってるねぇ」

にやりと笑いながら戦いの中心に姿を現す。
皆、突然現れた俺に驚いたようで戦闘が一瞬止まる。分けが分からずにぼーっとしている者もいたが、大半は怪しい格好の俺に対して警戒を抱いている。

「それじゃあ
・・・・・・イタダキマス！」

そう言うなり鬼の懐に入り込んで刃を突き立てる。
鬼は突然のことにうまく反応できなかったようで、その腹に刃が刺さり血しぶきがあがる。そして、俺は腹に刃を突き刺したまま自分の手から巨大な口を作り出す。

まずは一口

刃を突き刺した所の周辺の肉をごっそりと喰いちぎり捕食する。
すると、鬼は目が覚めたように暴れだし、俺の体を吹き飛ばした。
体が思いっきり地面にたたきつけられる。・・・が、すぐに起き上がって体制を整え、捕食に成功した部分から力を取り込んでいく。

少ししか喰らえていないが力の足しにはなる。
そして、視線を鬼の方へ向けようとすると、再び体が吹き飛ばされた。

「がっ」

今度は岩に叩きつけられた。先ほどまで自分がいた場所を見てみると鬼の腕の一本があった。
先ほどの特攻で完全に敵とみなされたらしい。先ほどのヒトの群れよりも優先して俺を排除しようとしているようで、力を取り込んでいる隙を見てこっちまで飛んできたようだ。

怪力な上に俊敏な動きって・・・まじかよ、おい。
隙を突くにしてもそうなんどもできそうじゃないな・・・。

もう一本の腕が迫ってきているのが見えたので、今度は回避できるように体制を整えてその場を離脱する。
そして、今突き出された腕のほうから鬼の背後へと回りこむ。
そこにできている大きな隙めがけ、己の渾身の力を込めて刃で切りつける。
刃が肉に食い込み、特に抵抗なく腕を断ち切った。

みごとに切断された一本の腕が宙を舞って地に落ちる。
ずしん、と地面に落ちた腕が大地を震わせたのと同時に鬼が叫び声をあげて残っている腕を振り回し始める。
このままだと巻き込まれてしまうと感じ、その攻撃を避けながら鬼

から距離をとる。

攻撃はなんとか避けきれるが・・・
たぶん突っ込んでいっても吹き飛ばされるだろう。ここは体内のオラクルをかき集めて一発でえぐり取るか・・・？

相手との距離をはかりつつ少しずつ力をためていく。己の全身から少しずつ力をひねり出していく。

鬼は腕や脚を使って攻撃を仕掛けてくるが、届かない。ときどき放ってくる巨大なエネルギーも顔が見ている方向を見れば、危なげなく避けきることができる。

そして、そのままどちらに攻撃が当たることもなく数分が過ぎていった。

◆

鬼の攻撃が自分の近くをかすめていく。
もう、俺には山一つを吹っ飛ばせるほどの力がかき集められている。

さて、そろそろ放つか・・・と考えていてところに鬼が突っ込んできた。
それを好都合ととらえて懐に入り込む隙を探す。

一本の腕が迫ってくる

右に避ける

避けたところにエネルギーの塊が突っ込んでくる

上に飛ぶ

二本の腕が同時に迫ってくる

片方の腕に乗りその腕を鬼に向かって駆け上がる

鬼の顔がこっちを向く

刃に力を乗せてかまえる

ついでに最初に喰らったエネルギーも上乗せして刃を振りかぶる

豪！！！

刃を振り下ろした瞬間にすさまじいほどのエネルギーが解き放たれる。
それは鬼の体の半身を奪い、空へと消えていった。

◆

鬼は倒れ、その場に立っているのは俺一人。

ヒトの群れが近づいてくるのがわかる。　が、それは特に気にせず、まずは自らが倒した鬼を喰らおうと手から巨大な口を作り出し、喰らい始めた。

第三話（後書き）

まずはリョウメンスクナノカミを突っ込んでみました。
ネギま！とのクロスです。

本編に届くまで時間がかかると思いますが、長い目で見守って下さい。

第四話

さて・・・

「貴様の持っているその力は危険だ。
よってここで排除させてもらうぞ。」

どうしてこうなった・・・・・・

◆

「そこにいる者よ　何者だ」

先ほど倒した鬼を喰らっていたら、俺が現れるまでこの鬼と戦っていた集団がやってきた。
鬼を喰らいながら話すのもあれなので鬼を喰らっていた口をしまい込む。

彼らは２０～３０人くらいの集団で、今はリーダーらしき一人の男が前に出てきて話しかけている。
こちらを警戒しているのは明らかで、周りを見てみると、後ろの方で木の陰に隠れて弓を構えている者、自分の体の陰に札を隠して何かを呟いている者がいるのがわかる。

ここまでやるかよ、おい。
確かに結構な不審人物？だろうけどさ・・・

俺は今、下に黒いズボンをはき、上はローブのような灰色の布を身に纏っていて、他には何も身につけていない。戦闘に使っていた刃はすでに体の中に取り込んでおいた。

周りと比べてみても結構な違和感がある。
顔は俺の生前の顔とそう大差ないものになっているので、周りともそこまで変わらないが・・・
身につけているものでかなり俺が浮いているように感じる。

「答えろ、お前は何者だ。
それとも答えられないか？」

「いや、大丈夫だ。ちゃんと話せる。」

俺が返事もせずに固まっていたのを見て再び声を掛けてきた。
俺としては現状の把握がしたいのでそれに応じる。

「そうか
　では答えてくれ。お前は何者だ？」

「俺のことは・・・とりあえずイザナギとでも呼んでくれ。
　もともと名前は持っていない。」

前世の名を名乗るのもあれだったので、思いついた神の名前を名乗っておく。
世界を作った・・・という点ではそう大差ないので問題ないだろう。

「神の名をかたるなど、ふざけているのか？」

「少しくらいは大目に見てくれ。
　本当に名前が無いんだ。」

どうやらこいつは堅物らしい。
名前くらいで怒るなよ・・・まったく。

「まあいい

それで、どこの者だ？何故ここにいる？
そして今、何をしていた。」

「俺がどこの者でなぜここにいるか・・・か。
俺はもともとここらへんにいたんだ。なぜ？と問われても困る。」

「では、もともとここに住んでいたと？」

「そう考えてもらってかまわないよ。」

「・・・では、何をしていたのだ。」

さて、どう答えたものか・・・
何をしていたのかはある程度見えていたはずだから下手なごまかしはきかないだろう。

しかし・・・そのまんまのことを話しても信じられないだろうし・・・

「どうした？」

男が詰め寄ってくる。
仕方がないか・・・

「じつは・・・
俺は体の中に妖のようなものが住んでいてな、そいつにこれを食

わしていたんだ。」

「何？」

周りの警戒が強くなるが、これくらいは言っておかないとごまかしが効かないだろう。

「それは本当か？
お前の中に妖魔がいて、それにこの鬼神を食わせていたというのは」

「ああ、本当だ。
なんなら証拠を出そうか？」

そういって手を上にあげる。
集団の中の半分はどこか訝しげな眼でこちらを見つめている。

「危険はないのか？」

「ああ、問題ない。
こいつは俺が操っているから暴れだすこともない。」

「では、頼む。」

上にあげた手を前にのばして口を作り出す。

すると、集団の中からヒッという声が漏れた。そちらの方に眼をやると一部の者が身を隠し、そうでない者は武器を構えていた。

結構な反応だな。

ま、こんなのを見たらそうなっても仕方がないか。

作りだした口を鬼の方に向け、むさぼるように喰らう。

「これでいいか。」

「・・・あ、ああ。」

リーダーのようなヒトも少し緊張して体が固まっていたようだ。返答が遅い。

「こちらからも聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「まだ聞きたいことはあるが・・・

まあ、いいぞ。」

口を体に戻して話しかける。

口を戻したことで集団の緊張も少しほぐれたようだ。大半が武器を下した。

「では、この鬼はなんだ？」

「その鬼はリョウメンスクナノカミという、飛騨の大鬼神だ」

は？俺、そんなのを相手にしてたのかよ。

「その大鬼神がなぜここにいる？」

「実は・・・ある術師がこの鬼神を元に式紙を作ろうとしてな。
この京の都の地に召還したのだ。」

神のごときものを扱おうとするなんて馬鹿な奴もいたものだ。
しかも・・・ここは京都だと？わざわざ都の近くでやらんでも・・・
・・・

「それで？あんたらがその後始末をしていたってわけか？」

「そうだ。
やつは封印を解いてこの地に召還したが制御ができなかった。
それを我々　呪術協会　の者たちが再封印するために来たのだ。」

ほー、なるほどね。
やっと状況が理解できたよ。

「これからあんたたちはどうすんの？

鬼神は死んじまってるんだけど。」

「まずはそれの封印作業に入る・・・と言いたいところだが・・・・・・」

「ところだが？」

まだ何かあるんだろうか？
まったく、面倒くさい。

「貴様のことをどうにかしなければならない。
その力は放ってはおけない。
どうする、われらのもとに来るか？」

「それは嫌だね。
組織を信用できないし、今これだけ警戒されているんだ。
そんな奴らの中心地には行きたくない。」

俺を囲みこんで武器構えて交渉するってあんまりだろ？
こんなやつらと一緒になんて絶対いたくないって。

「そうか・・・ならば」

「ならば？」

「貴様の持っているその力は危険だ。

よってここで排除させてもらうぞ。」

その言葉とともに周りの者たちが一斉に構える。

おいおいありえねえだろ、こんな展開。

「妖魔なんぞがそのような力を持ったところで害悪にしかならん。
我らのもとにつくならともかく、野放しにはできん。」

「交渉の余地は？」

「無い！！」

話していた男が刀を手に突っ込んでくる。

危なっ。

右に避けるがもうすでに囲まれている状態だ。
武器を持っている者が次々と突っ込んできている。

「くそっ！」

逃げてもいいがここで殺しておかないと。
情報がその「呪術協会」とやらに伝わったら面倒なことになる。

体から刃を形成し振り回す。
それによって数人が吹き飛んだが、まだまだ数は多い。

「囲め！！
　奴をしとめるんだ！！」

飛ばされていったヒトの部分がすぐに補われる。

面倒くさいな・・・きりがない。

集団は休みなく次から次へと襲いかかってくる。
矢が飛び、刃がかすめ、炎にあぶられる。まだ直撃はしていないが
時間の問題だろう。

一気に全部喰らうか・・・
俺のイメージ通りにいけば一瞬で終わる。

考えている間も攻撃は続く。
召還された式紙か、鬼も集団にまじり始めていた。

くそっ
時間が必要だな。
・・・・・・ならば

手を地面に置き、そこから黒い殻を作って自分の体を覆う。
一瞬の間にできたそれに驚いて攻撃の手が少しゆるんだが、なおも攻撃は続く。
しかし、黒い殻はすれらの攻撃すべてをはじき返す。

「奴は防御にはいったぞ。
今のうちに攻撃をたたき込め！！」

攻撃が激化していく。

「各自最強の一撃をたたき込め！！
一切容赦をするな！！」

◆

この殻の中なら攻撃は届かない。
自分の作業に集中できる。

イザナギ（仮）は、殻を作り出したときに地面につけた手をそのままに、そこから自らのオラクル細胞を地面に浸透させていった。
地中を通って周りの地面に己の体が広まっていく・・・

あせるな・・・
広く、広く広げていけ。
誰一人として逃がさぬように・・・

オラクル細胞はどんどん広がっていく。

◆

「やれ！
どんどんやるんだ！！」

集団は次から次へと攻撃を繰り返していくが殻にはヒビ一つはいらない。

「どうなってるんだよ、あれ。」

集団には少し疲れの色が見え始めていた。
が、その時

「さあ、もうおしまいだ・・・」

イザナギ（仮）が殻を開いて姿を見せた。

「どうした？自ら防御をやぶるなど、おかしなことをする。」

集団は少し怪しんだが構えを解く様子はなく、隙を窺っている。

「だからもうおしまいなんだよ・・・・・・

それじゃあ・・・イタダキマス！！」

「は？」

イザナギ（仮）のおかしな言葉を理解できる者はいなかったが、皆、すぐに理解した。

地面が揺れて自分たちの周りを黒い壁が囲んだ。

そして一人ひとりの足元から口が生えて彼らを飲み込んでいく。

皆、悲鳴をあげて食われていったが、誰一人例外なく足元から生えた口に食われることになった。

そして残ったのはイザナギ（仮）一人・・・・・・

「これで全部食っちまったな。」

そう呟いてこの場から立ち去る。

だが、イザナギ（仮）は知らない。

この地にまだ生存者がいたことを・・・

そしてその者が呪術協会に報告に行ったことを・・・・・・

第四話（後書き）

頑張りました。第四話です。

これからいろいろと独自設定も入っていくと思いますがとりあえずよろしくお願いします。

第五話（前書き）

少し遅れました　すいません。

五話目です　どうぞ。

第五話

「――――――――――――――――んっ」

意識が覚醒していく。
目を開いてまわりを見てみるが真っ暗で何も見えない。

「――――――――――――――――？

ああ、そういえば・・・」

心の中で「開け」と念じる。
すると自分を覆っていた黒い殻が開いていき、視界にまぶしい光がはいってきた。

まだ外の状況がよく分かっていなかったから一応警戒して殻にこもって眠ったんだっけ・・・

イザナギ（仮）がリョウメンスクナノカミによって長い眠りから起こされてから一日が経った。
もう昼に近いらしく、空の高い所に太陽があがっている。

昨日はよく食べたっけな・・・

体を伸ばしながらそう考える。

今、周りには木しかなく、人の気配は一切しない。鬼神を喰らった場所からさらに奥に入った山の中にいる。

昨日、鬼神を喰らった後のイザナギ（仮）はまだ目が覚めてから時間がたっていなかった。そのため、いきなり人の前に行って話をしても、いろいろなところでぼろが出てしまって大変なことになるだろうと考え、わざわざ山奥まで来て現状把握をしようと考えていた。

しかし、山奥についたころにはすでに辺りは真っ暗になっていて何もする気が起きなかったので、殻にこもって眠っていたのである。

とりあえず、今の状況をしっかり確認しておかないと。

イザナギ（仮）はそう考えると近くにあった大きな木に背を向けて座った。

◆

まずは今の体についてだな。

この体は人間のものとは全く違い、オラクル細胞によって作られたアラガミの体。

強度は強く、神機がこの世界に存在していない以上、まず壊れることはないだろう。

血が流れているのか、骨は人間と同じように並んでいるのか・・・・・・などといったことはよく分からないが、基本的な動かし方は前世の人間だった時の動かし方と同じで問題はない。

特殊な点として、自分を構成しているオラクル細胞を自由に操っていくらでも体を変化することができるようだ。まあ、オラクル細胞の数によって大きさの限度はあるが・・・・・・

まあ、その点については問題ないだろう。

昨日の捕食で分かったことだが、自分が喰らったものは体内に取り込まれた後すべて消化されてオラクル細胞へと変換されるようだ。また、特に生物、その中でも力の強いものほど大量のオラクルを作り出すことができるらしい。

今、昨日の鬼神のおかげで、体にはとてつもない量のオラクルが集まっている。やろうと思えば日本の８割は覆うことができるだろう。

そして、昨日分かったことで特に便利だったことは喰らった相手の知識まで得ることができるということだ。これがわかった時は「チ

ートってすごいな・・・」と感動したよ。

しかし、知識といっても得られるものはごくわずか。記憶ではないので、喰らった相手の考えや生き様、人脈、生活などといったことはもちろん分からないし、得た知識はその人にとっての常識なので今までの知識とは異なったものになることもあるだろう。

それでも知識が少しでも得られるなら素晴らしいアドバンテージになる。

組織の知識が手に入らなかったのは残念だったが、手に入る知識の中に言語があったことと戦闘に関する知識があったことはかなりありがたい。

この世界で生きていくために言語は必須だし、日本語しか分からないのでも問題だ。誰かに習うにしても知り合いはいないし、身元不明の人物など話にならないだろう。

戦闘に関する知識は、体を鍛える方法や困った時の対処法、剣術、槍術、柔術、呪術など、ありとあらゆるものが手に入った。まあ、これは本当に知識だけのものなので実際にやれるわけではないし、今後も使えない物もある。でも、戦闘術の型やその完成形までも知ることはできたので、訓練次第で完璧に自分のものにできるだろう。

よくよく考えてみると本当にチートじゃね？

◆

よし、ある程度の把握はできた。

今は鎌倉時代前の平安時代あたり・・・

このまま日本にいても当分の間は大して面白いことはないだろう。

それならば、まずはこの新しい世界を旅してみよう。

幸いにも（？）移動方法も食料も何も問題はない。言語も特に心配する必要はない。

まあ、戦国時代や江戸時代には顔を出しに戻ってこようとは思うが、それまでは世界中を旅してまわろう。歴史は得意というわけではなかったから詳しくないが、何も知らない状況でその歴史に立ち会ってみるのも面白そうだ。

名前は・・・イザナギ、というのは反感があったから変えるか・・・

アジアでは「シキ」、他では「ノヴァ」としようか。これなら問題はないだろう。

まずは体を鳥に変えよう。

そして世界を見てこようか・・・・・・

◆

その日、日本の各地で巨大な藍色の鳥が目撃された。

その鳥の大きさは人々が見た中で確実に最も大きいもので、巨大な翼で西の方へ悠々と飛んで行ったそうだ。

また、その日から京都付近で灰色の布を纏った黒髪の大男の捜索が始まった。

其の者は、ありとあらゆるモノを喰らう鬼とされ、排除すべきものとされた。

その存在は、子供たちにも「怖い鬼が出る」と伝えられ、あっという間に全国へと広まっていった・・・・・・

第五話（後書き）

主人公の名前が決まりました！！

そして主人公の世界進出＆ナマハゲ化です。

たしか日本のこの時代なら１７０ｃｍってかなりの大男ですよね。

更新は不定期になるかもしれませんが、これからもよろしくお願いします

第六話（前書き）

あけましておめでとうございます

「笑ってはいけないスパイ２４時」見ながら携帯で書き上げたので

出来は不安ですが・・・・・・

第六話です　　どうぞ

第六話

「イタダキマス！」

今さっき倒した二人組の賞金稼ぎに向けて両手を伸ばしてそれぞれから黒い口を作り出し、それで倒れている二人に喰らいつく。

最近やたらとこういう奴らが増えてきたな・・・

シキが目を覚ましてからだいたい４００年ほどの時が経った。

もう既に世界を巡ることはできていたので世界の至る所にある戦場を巡っていたのだが、１００年ほど過ぎてから自分の賞金が発生してしまったらしい。

その賞金は初め現在の価値で５０万ドルほどだったのだが、賞金稼ぎが現れるたびにそいつらを喰らっていったため、今では現在の価値で５００万ドルほどの賞金首になってしまっている。しかも、そのせいで同じ場所に居続けると身の程知らずの賞金稼ぎどもが絶えずやって来るようになってしまった。

最近は賞金稼ぎの知識の中に入っていた暗殺向きの体術を習得するためにこの辺りに拠点を置いていたのだが・・・

そのせいか異様に賞金稼ぎどもの数が増加している。

また世界中を転々としていくかなぁ・・・・・・

新しい体術もほとんど習得できたし、戦闘技法はあらかた身についてるからな・・・

ちなみにこれまでの６００年の間に剣術、槍術、柔術、拳法、暗殺術を自分のものにすることができた。

世界を転々としながらだったが、ひとつひとつに数十年をかけたので相当な技術を手にしている。そういや最近魔法に関する知識くらいしか得られて無いんだよな。

しかも全員似たようなものばっかだし。

魔力なんか分からんから意味が無いのに・・・

半ば諦めながら新しい知識求めて喰らった奴らを取り込んでいく。

あまり強くなかったから余計期待が薄いんだよなぁ・・・・・・

まず自分と比べると微々たる力が加わり、続いて知識の一部が入って来る。

「おっ！？
　これは面白いじゃないか。」

今回は新しい知識が混ざっていたみたいだ。

これまでも「魔法世界」とやらの情報は得られていたのだが、行き方はよく分かっていなかった。
が、今回はそれについて新しい知識を得ることができた。どうやら、最近始まった魔女狩りの被害者を取り込むために「魔法世界」に繋がるゲートを開く場所を増やすらしい。
しかもこの様子だと警戒も薄そうだ。

「こりゃ
　行くしかないだろ」

今一番近くにあるゲートは・・・・・・あの石造りの遺跡か。
まずはこの賞金首の姿から目立ちにくい周りに合わせた姿に変えて、と。

黒髪黒目から茶髪に灰色の目に変わり、小柄な体に賞金稼ぎが着て

いた服を身につける。

さあ、行くとしようか。

顔ににやりと笑みを貼り付けてゲートのある方向へと足を向ける。
そしてゆっくりと歩みを進めていった。

第六話（後書き）

今年も頑張っていきたいと思いますのでよろしくお願いします＞（　　）＜

感想など、お待ちしています。

第七話（前書き）

久しぶりの投稿・・・

学校が始まって大変になってきましたが・・・

まあ頑張るので見ていってください。

七話目です　どうぞ

第七話

薄暗い中、とある石造りの遺跡には様々な格好の人々が集まっていた。

周りを見渡してみると黒髪赤目の本当に魔女っぽい人もいれば、そこいらにいるような金髪の男性、赤毛の子供など、本当に様々なヒトがいる。家族連れもいるようだ

中には銀色の髪に金銀妖眼という目立ちすぎる輩もいた。

それらの人々の中心には白いローブを身に纏った金髪の男がおり、地面に魔法陣を刻みつけている。

それは遺跡の中央に位置している大きめの広場いっぱいに描かれていて、いくつもの複雑な図形が刻まれている。おそらくこれが魔法世界へと繋がるゲートになるのだろう。

これだけのヒトが魔法世界に行くのか・・・

噂を耳にしたヒトがここの近辺から集まって来たのだろうな。こんな機会などほとんどない上に次がいつあるのかも分からないのだし・・・

まあ、それはどうでもいい。

あの様子からしてあの白ローブは魔法世界の者なのだろう。ちょうど魔法世界の知識が欲しかったんだよ。後で喰らわねばな・・・・・・

今はあまり会話をしているヒトはいなかったため近くにあった石柱に寄りかかって周りを観察している。
すでにここにいる人々のチェックは終わっており、特に危険な人物はいないと判断されている。

思ったより甘くはなかったが問題はない。

時折聞こえてくる声によるとどうやら日が完全に姿を現してから移動を始めるらしい。どうやらもうすぐ出発できるようだ・・・・・・

◆

「時間だ。
皆の者！！この陣の中に集え！出発するぞ！！！」

白ローブが全体に響きわたるように声を張り上げた。

「我らが今より向かうは魔法世界、魔法と共に発展せし神秘の世界だ。
それ故に混乱するかもしれないが、勝手な行動は慎んでもらいたい。
我々に付いて来さえすればその後は自由だ。我々は諸君らを歓迎しよう。」

白ローブが話を終えて魔法陣に魔力を込め始めた。
今、人々の視線は白ローブに集中している。自分の国の力を少しでも増やすためのモノだろうが、案外効果はあったようだ。中には高魔力保持者や珍しい能力を持つ者もいることがあるのだから。
先ほどからにやけ続けていて気にしていない金銀妖眼などの例外もいるが・・・

突然周りの景色が歪み始め、足元の感覚も不安定になっていく。
転移が始まったようだ。
周りを見渡してみると多くのヒトがあたふたしている。もうすでに石造りの遺跡は眼に入らず、代わりに視界は白いもやが覆っている。
そして眼に入るモノは足元の魔法陣だけになっていった・・・・・・

◆

数秒がたち、視界の白いもやが晴れてきた。次第に足元の魔法陣の輝きは薄れ、大地が見えるようになってきた。

視界に光が入ってきたので視線を上げる。

すると、目の前には見る者を圧倒させる自然が広がっていた。

大地は険しい岩山のような場所もあれば、広大な森もあり、空にはいろいろな大きさの岩が浮いており、その間を見たことのない生物が翼を広げて飛びまわっている。

この光景に人々は目を丸くし、口をあけて驚き、一部の者は大きな歓声をあげていた。

「これから我々の国へと移動する。

この付近にもヒトの住む場所はあるが、どういう扱いになるかはわからん。
迷うことのないようにしっかり付いて来い！」

白ローブが声をあげて皆に話を聞かせ、歩き始めた。
そしてそれについて人々も歩いていく。

魔法世界には無事着いたことだし、そろそろいいか・・・・・・

変えていた姿を元の自分、賞金首とされている姿へと戻す。

「少し待ってもらえないか？」

顔に笑みを張り付けて白ローブに向かって声をかける。

「なんだ？
時間をかける暇など　なッ！！？
何故お前がここにいる！？　絶対捕食者！！」

そういやそんな呼ばれ方もしてたっけ・・・

白ローブは振り返りながら答えていたが、俺の姿を見た瞬間に即座に杖を取り出して戦闘の構えをとった。

いきなり声を張り上げた白ローブに驚いて周りの人々の視線が集まる。それらは俺のことを知らずになんとなく構える者、近くの者に隠れる者、怯えて震えだすものなど、様々な動きをしていた。

「俺か？ついに魔法世界にも進出しようと思ってな。
先ほどのゲートに乗せてもらったのだよ。
そして、できればそんな名ではなくノヴァと呼んでもらいたいね。
せっかく名前があるのだからな。」

「チッ！
『魔法の射手　連弾　光の7矢』！！」

白ローブが取り出した杖を中心に現れた光の矢が俺に殺到する。
普通の人間なら死ぬだろうがあいにくこの身は普通じゃない。体は一切傷つかず、周りの地面を削った光の矢によって砂煙が起きただけだった。

「どうだ・・・これは防げんだろう・・・・・・」

白ローブは冷や汗をかきながら正面を見据えている。

この程度で終わるなんて本気で思ってるのかねえ？
まあ、すぐに喰らうから関係はないが・・・
砂煙の中で手を黒い口に変える。あの程度のザコならば刃を出す必要などない。
砂煙が切れる前に突っ込んでやろう。

「なんだ・・・
奴も大したことなどないではないか。
この正義の魔法使いにかなうわけなどなかったのだ！！
ハハハハハハ　　」

白ローブがふざけたことを言って笑い始めた。
これ以上喋らせると面倒だと思い、突撃のために脚に力をためる。
相手の声がした方に目を向けて一気に飛び出す！

「ハハハハハハハ　ガフッ」

一瞬で白ローブの目の前まで接近し、腹をけり飛ばす。
そしてそのまま飛ばしていった方まで向かい、転がっている白ローブを踏みつける。

「何が正義の魔法使いだ・・・うぜぇんだよ。

今更だから命乞いも聞かんし、見逃しもせん。

では、イタダキマス」

「ま、まてっ！！まってく」

白ローブが何かを言い終わるのも待たず、手にある口で喰らい始める。
初めに頭をむしり取り、手、脚、そして胴体と、なに一つ残さずにきれいに喰らってやった。
周りは血で汚れてしまっているが・・・

「さて、お前らはどうしようか？」

にやりとしながら周りを見る。

『うわあああああああああああああああああ』

すると人々は叫び声をあげて逃げて行った。
大人は近くにいる動けない物や小さな子供を抱え、とにかく速くここから、この「化け物」のいる場所から遠くへ逃げようと必死で走って行った。

「お前らがどうなろうが別にどうでもいい。

この世界での常識などの新しい知識も入手することができたことだし・・・

まずはこの世界を巡ろうか。
それに当分はこの世界にいるつもりだからな、落ち着けるような場所も探さなければな・・・・・・
まあ、時間はあるのだしゆっくりやるか。」

そう呟きながら手の口を元に戻す。
そして、ひとつ大きく伸びをして白ローブの向かおうとしていた方向に向かって歩き始めた。

第七話（後書き）

金銀妖眼という中二病なキャラを作成してみました。
転生者の一人としていつか馬鹿なことをしてもらおうかと思っています。

それと主人公の二つ名を募集しようと思います。
みなさん、できれば意見、感想をお待ちしています。

第八話

「本当にこんなところに奴がいるのかよ。」

「情報は間違いないはずだぞ。
最近はここに根城を置いたようだが・・・」

大地を焦がすような太陽の光が降り注ぐ中、二人の男がある崖の上で話し合っている。
片方は大きめの白いローブを身に纏った赤髪の男で、自分の背丈と同じくらいの杖を手にしている。まず魔法使いで間違いないだろう。
そしてもう片方の男は杖を持っている男よりも二回りほど大きく、肩に巨大な剣を担いでいる。いかつい顔をしたスキンヘッドで、子供なら泣いて逃げ出すくらいだ。

「この仕事が終われば、一生遊んで暮らせるぞｗｗｗ」

「だな。
前までは誰一人逃すことのない怪物だったらしいが・・・
最近はこんなところに籠もってばかりだからな。
相当楽に打ち取れるんじゃないか？」

「もう歳なんじゃねえのか、おいw
わざわざこっちの世界まで来たんだ、さっさとやって観光でもしようぜぇwww」

「はぁ、少しくらいは気を引き締めろよ・・・」

どうやら賞金首を追って魔法世界までやってきたモノ好きらしい。魔法使いの男には大物を狩りに行くはずだというのに緊張感が全く見られず、笑いながら剣士の男に話しかけている。剣士の男はそれを見てため息をついて注意をしたりしているが、こちらも緊張らしいものはない。

「ハイハイ。ワカリマシタヨ―」

「ったく・・・

賞金が出てから数百年は生き残っている大物なんだぞ、頼むからへまはしてくれるなよ。」

「でも最近は食べ残し？が多いじゃん。
やっぱもうそろそろ限界なんじゃない？」

「それもそうだが・・・とにかく油断だけはするなよ。
いくら最近生きて帰ってくるものが多いとはいえ結構な数が奴にやられているんだ。
下手したら俺らも奴の腹の中だぞ。」

「へーい・・・
で、この辺りのどこらへんにいんの？」
「あそこに見えるでっかい横穴の中だ」
剣士の男は自分たちが立っているのとは反対側にある方の崖を指差した。
「ん～～？」
指差した方を見ると崖の上から数十メートルほど下に、不自然に開いた巨大な穴がある。周りにはそんな個所は見当たらず、きれいにその部分だけがえぐり取られており、中はまっ黒になっていて何も見えない。
また、その穴から上にはいくつもの小さな穴があいている、おそらくあれを使って地上に出てくるのだろう。まあ、他の賞金稼ぎがあけたものかもしれないが・・・
「よくこんな変な所に住んでいるよね～
崖の下にはへんな獣がうごめいてるし。」
「俺らみたいな賞金稼ぎ対策だろう、そうでなければ狂っているだけだ。」
「げ～、狂ってるのは勘弁。
で？あのちっさい穴使って下りてくの？」

「そうするべきだろうな、あの横穴から狙い撃ちされても困る。」

「ほいほーい。じゃ、いきますか？」

「ああ。

数百年生きた絶対捕食者　ノヴァ　どんな奴か拝見させてもらいますかね。」

「は？知らねーの？

最近の食べ残しのせいで絶対捕食者から捕食者に格下げされたんだけど・・・」

◆

「うわっ、一面まっ黒じゃん。」

小さな穴を伝って横穴の中に入ってみると、岩でできた壁ではなく、つるつるとした黒いナニカが穴の中の壁を覆っていた。穴は縦にも横にも大きいが、奥行きも結構あるようで、奥の方は真っ暗になっている。

「気味が悪いな。
まあとにかく、奴の根城に入ったんだ。警戒していくぞ。」

剣士の男は持参していたランプに火を入れて魔法使いの男に渡すと、剣を構えながら奥へと進んでいく。

「おい、待てよ！！」

魔法使いの男も置いていかれないようにそれに続いていく。
洞窟のような穴の中にはそれに合わせて「カツン、コツン」と音が響いていく。

◆

「いくら慎重に行ってもこの様子だと気づかれているかもしれないな。」

剣士の男は苦笑いしながらつぶやく。
まだ少ししか奥には来ていないが静かすぎる穴の中に足音が響き渡っている。これならば寝ていても気づくことができるだろう。

「じゃあさ、俺の魔法でもぶっ放してみる？

『闇夜切り裂く一条の光』」

魔法使いの男は片手に持っていたランプを床に置き、呪文を唱え始めた。
同時に持っている杖をしっかりと握りしめ、片手を前にあげる。

「おい！ちょっと待てっ！！」

「『わが手に宿りて敵を喰らえ　　白き雷』！！」

剣士の男の制止を聞かず、魔法使いの男が呪文を詠唱し終えて魔法を発動する。

前に出した手に集まった魔力が雷となり、前へと放たれる・・・・・・・
かと思いきや予想外に何も起こらない。

「は？ちょっと待てよ。おかしいだろうがよ、おい！
なんで魔法が発動しないんだよ！！」

魔法使いの男が混乱して杖を振り回す。
剣士の男も魔法の発動をあきらめていたのでかなり驚いている。

「魔法が使えない場所・・・だと？
なんてめんどくさい所にいるんだよ・・・」

「ぺたっ、ぺたっ、ぺたっ・・・」

「！！？」

足音のようなものが聞こえてきた。
剣士の男が持っていた剣を強く握りしめる。

「そこにいる奴、名を名乗れ。
・・・出身地と用件も含めてな。」

うっすらとターゲットの体が見えてきたと持ったら声が聞こえてきた。
やや低めの、この穴の中によく響く声が。

「名乗れと言ったが・・・聞こえていないのか？」

足音が聞こえなくなり、体をしっかりと視認できるようになった。
黒色の髪は所々逆立っていて、黒くよどんだ眼がこちらを鋭く見つめている。体は剣士の体より一回りほど小さく、ターゲットの特徴である灰色のローブを身に纏っている。

「チッ　んなのどうでもいいだろうが！！」

「よくはない。重要なことだ。」

魔法使いの男が怒鳴るもノヴァは全くペースを崩さない。

「旧世界のフランス出身、ジョルジュ・・・」

「・・・ったく、同じくフランス出身、ジャン」

話を進めるために剣士の男、ジョルジュが名乗りを上げ、それに続いてすぐに魔法使いの男、ジャンがめんどくさそうに名乗った。

「ほう・・・フランスか。
最近はそっちの知識を仕入れてなかったな・・・・・・」
「だったら何だってんだよ。さっさと死にな！
『魔法の射手　集束　雷の５１矢』！！」

ゆっくりとしたノヴァのペースにいら立ってジャンが杖を振る。
が、先ほどと同じく何も起こらない。

「くそっ。ほんとどうなってんだよ！」
「なんだ、この場所を知らんかったのか？
馬鹿な奴が来たものだな・・・」
「何だと！？コラ！！？」

鼻で笑いながら話すノヴァにジャンが切れる。
それに対し、ノヴァはやれやれと首を振りながら話し始める。

「ここの地は魔法が一切使えない、いわゆる魔法使いの墓場だ。
貴様のような愚か者の対策だったのだが・・・おかげでいいえさが手に入ったよ。」

「何だとッ！」

ノヴァはそう告げるとゆっくりと前へ一歩踏み出す。

「チッ、ジャン！さっさと逃げろ！！
ここではお前は何もできない！！」

「くっそ
頼んだぞジョルジュ！！」

ノヴァの動きに反応してジョルジュが前に出てジャンを後ろに押す。
ジャンは少しためらったがすぐに自分の状況を理解して来た道を駆け戻って行く。

そしてこの場にはノヴァとジョルジュ、剣士だけが残った。

「一人だけになったが・・・貴様は倒させてもらうぞ！！」

ジョルジュが瞬動によって一瞬で近づき、剣で切りかかる。

「なかなかの速さだが・・・足りんな。」

ノヴァはその剣の一振りを体を少しずらすだけでかわすと、剣士の

背後へと回る。
そして柔術を利用して剣士を地面に叩きつけ、黒い壁から鎖を作り出して四肢を拘束する。

「この穴は俺の腹だ。
壁は俺の細胞で包まれ、何でも簡単に取り込むことができる。
最近は成長途中の奴が多かったからよく食べ残していたが、お前らは情報収集のために俺の胃袋行きだ。決して逃がさん。
うれしかろう、俺の中で生きれるぞ？」

「そんな・・・ウソだろ、おい・・・・・・」

ジョルジュはすぐに捕らえられてしまったことで分かった実力の差、そして今の状況に絶望し、うなだれる。

「入り口はすでに閉じ、お前の仲間の魔法使いもとらえた。
遺言はあるか？あっても聞きはせんが。」

「糞が・・・死に腐れ、化け物！」

「そうか・・・ならばこれで終わりだな。
イタダキマス」

足元の黒い床が蠢き、巨大な口を作り出す。
ジョルジュは最後の言葉を吐き捨てた後、ノヴァの方を睨みつけ・・・・・・そのままの状態で巨大な口にヒトノミにされた。

バキッ　　ゴキッ

バキバキボキッ

ベキッ　　バリボリボリ

ムシャムシャムシャムシャムシャムシャムシャ

「うん？　そうかそうか、なるほど・・・
ヨーロッパの辺りで大きな戦争が起きたのか・・・時期的に百年戦争かな？」

たった今食べた男たちから新鮮な知識を手に入れる。

どうやらフランスの辺りで大きな戦争が起こり始めたらしい。
特に詳しい情報もなければ、これといって珍しい知識もない。そういう意味ではハズレだったが、面白い情報が手に入った。

この戦争というのが百年戦争ならば当分楽しめるし、終わったら日本に向かえばちょうど戦国時代だ。これはおもしろくなってきた・・・

「すぐに旧世界に行かなくてはな・・・
今回の戦争はどうしようか。この前までは傍観しながらたまにちょっかいをかけるくらいだったからな、これからは違うことをしてみたい・・・・・・」

穴の外に向けて足を進めながら手を組んでしばらく考えてみる。

「ん？そうだ。

体を剣に変えて魔剣となって戦場に出てみるか？
最高のつくりの剣ならばいつか相当の使い手のもとに行きつくだろうし・・・
嫌な使い手ならば喰らってしまえばいい。
いっそのことあらゆる使い手を喰らって剣の知識を増やすか？

ククク　どちらにせよ楽しめそうだ。

では、行こうか。
この場所は・・・別にこのままにしておけばいいか。」

体に翼を生やし、穴から空へと飛び立つ。

向かうのはこの世界と向こうの世界をつなぐゲート・・・

魔法世界に根城を残し、ノヴァは再び旧世界へ・・・・・・

第八話（後書き）

感想ってほんとありがたいですねぇ。
やる気が出ます。

これからの更新も不定期になると思いますが一週間に1，2回はいけるように頑張ろうと思います。

第九話

百年戦争が行われていた１４～１５世紀ごろ、戦場にある一本の魔剣が出現した――――――

その剣は全体が漆黒に包まれている大剣で、持ち主を選び、多くの命を喰らったといわれている。

その百年戦争の後、一時行方が分からなくなったが、しばらくして、日本、アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど、様々な国でそのような剣が発見されて記録に残されているが、いずれの国でも戦乱の中で発見され、その戦乱が終わった時にはすでに紛失している。

これらの国々の記録には、

「その剣に切れぬものはなく、その剣を壊しうるものもない」
「その剣は使い手の力を喰らって斬撃を飛ばす」
「その剣はヒトを喰らう」
「その剣と使い手は鎖でつながれる」
「使い手が負けたと判断された瞬間に剣はその使い手を喰らい、次の主を見つける」
「外道を働こうとしたもの、戦場から逃げ出すものも喰らわれる」

などといった記述が見られる。

人によってはとてつもない力となり、戦争に多大な影響を与えるこ

の魔剣は、今も戦場で戦う人々と共にあり、多くの命を喰らっているのだろう。

◆

――――――――――――――――――なんだ？何故こいつは戦場から遠ざかっている？

「逃がすな！！さっさと追い込んで始末するんだ！！」

十六、七人ほどの男が剣や杖を手に持って何かを追っている。

「そっちに逃げたぞ！」

「追いこめ！我らの正義のために悪を滅ぼすのだ！」

「そら、『魔法の射手　連弾　風の１７矢』」

「『雷の１９矢』」

「『光の１５矢』」

男の中で杖を持っている者はターゲットを追い詰めるように魔法の矢を放っている。が、逃げている者は森の中の木々をうまく利用してそれを交わして森の奥へと逃げていく。

魔法の矢は立ち並ぶ木々を破壊し、時折ターゲットの体をかすめながら次から次へと飛んでいく。

「よし、このままいくぞ。奴から目を離すな！」

魔法の矢は絶えずターゲットを狙い続け、奥へ奥へと追い込んでいく。

そしてついに森の木々が途切れ、ターゲットは崖の前に止まってしまった。

「追い詰めたぞ、吸血鬼！！
すぐに神の裁きを受けるがいい！！！！」

すぐに男たちはターゲットを囲み、各々の武器を構えた。

ターゲットは崖に片手をついて息を切らしている。

ターゲットは体はまだ幼い十歳くらいの少女のもの、逃げていたために少々汚れが付いてしまっているが、それでもなおきれいな長い金髪を持ち、整った顔にある鋭い目で男たちを睨みつけている。

「チッ

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』」

「させんよ！

『紫炎の捕らえ手』！！」

金髪の少女は何とか逃げ出そうと呪文を唱え始めるが、その詠唱が終わる前に男たちの魔法が発動し、少女を襲う。少女の足元から円筒状の火柱が発生して少女を拘束する。威力があるわけではないの

だが、その炎によって少女は詠唱が続けられなくなる。

「これがどうした？
こんなものでは真祖の吸血鬼たるこの身を滅ぼすことはかできんぞ」

「黙れ吸血鬼！！
今すぐにその肉を引き裂いて浄化してくれるわ！！」

「やれるものならやってみるがいい」

少女の挑発によって数人の男たちは怒りを見せるが、その男たちの中から一人の男が前に出る。

「ならばやってやろうではないか。
今ならちょうどこの剣がある、これならば貴様も楽に殺せるだろうよ。」

その男の手には一本の黒い大剣があり、その剣と男は黒い鎖で繋がっている。
男がその剣に魔力を込めると、その剣は刃を少し震わせ、うっすらと発光する。

「この魔剣は前の戦場で手に入れたものでなあ、切った相手の体を喰らうのだよ。

いくら真祖といえど、この魔剣にはかなうまい・・・」

「チッ（私ももうここまでか・・・）」

男が魔剣の切っ先を少女の方に向ける。

――――――――――――――――――――――――現状を把握した。これから行う行動は・・・

「さらばだ、汚らわしい吸血鬼よ。
死してその罪を償うがいい。」

そして魔剣を大きく振りかぶり、少女に向けて思いっきり振り下ろした・・・・・・

が、その魔剣は少女に触れる前に止まった。何の障害物もないというのに・・・

「どうしたよ、おい？」

「さっさとやっちまえよ！」

周りの男たちが急かすが、どれだけ力を込めてもその剣は一向に動

かない。

「っかしーな。なんだってんd『ガッ』」

魔剣が一向に動かないのでその魔剣に顔を近づけてみると、いきなり剣の鍔の辺りから黒い口が出現し、魔剣を持っていた男の頭を喰いちぎった。

ゴキッ　バリバリバリ
　　ベキッ　ボリボリ

「な、なんだよ。おい！！」

「どうなってんだよ！！」

ジャラジャラジャラジャラ

男たちは魔剣を持っていた男のありさまに驚いて動揺し、慌てふためいている。
そしてその間に魔剣からいくつもの黒い鎖が飛び出し、男たち全員をその場に拘束してしまった。

「い、嫌だ・・・
　まだ死にたくねえよ・・・」

「だ、だれか！
誰か助けてくれー！！」

「糞がっ！死んでたまｒ『グサッグサグサグサッ』」

男たちは何とか逃げようと暴れもがくが、黒い鎖は全くゆるまずに男たちをその場に縛り上げ、いたるところから刃を生み出して串刺しにした。

「な・・・なにがおこっている？」

少女は突然の出来事に驚いて動揺している。
男たちが串刺しにされて死んだことによって自分をかこっていた炎から解放されたが、今は男たちを殺した黒い鎖に囲まれている。

ジャラジャラジャラジャラ

少女が鎖をどうしようかと考え始めたところで黒い鎖が音を立てて魔剣のもとへと帰っていく。
数秒の間にすべての鎖は魔剣に取り込まれた。

「この剣は・・・？」

少女は恐る恐る魔剣へと近づいていく・・・

カッ

「なっ」

少女が魔剣まであと数歩の距離まで来たところで魔剣は刀身を光らせて姿を変え始めた。

魔剣は一度黒い球体へと形を変えた後、少しずつ頭や足、手を作り出していき、最終的には一人の男の姿へと変わった。

「ふむ、久しぶりの人間の体だな・・・
さすがにこんなお譲ちゃんを殺すような使い手は嫌だったからな・・・・・・」

「き、貴様は何だ！？」

自分の体の調子を確かめるような行動をしている男に向かって少女は問いかける。

「何だ？・・・とは失礼だな。
人に名を訪ねる時は自分から言うものだが？」

男はとにかくマイペースに少女に接する。

「くっ、エヴァンジェリンだ。
エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、真祖の吸血鬼だよ。」

「ほー、吸血鬼か・・・
見るのは初めてになるのかな？」

「こちらが言ったのだから速く言えっ！！」

「うむ、分かった・・・
俺の名はノヴァ・・・数百年の時を生きし捕食者だよ・・・・・・
」

長き時を生きる世界を喰らいしものと真祖の吸血姫は出会った・・・
この出会いは後にどうなるのか・・・・・・

第九話（後書き）

エヴァンジェリンの書き方に混乱中

どうやっていこうか・・・

第十話

一方を崖が多い、もう一方を森が覆っている少し開けた場所で一人の男と小さな少女が向かい合っている。周りには十数人の男の死骸が落ちていて、どこか異様な雰囲気になっている。

「・・・き、貴様が古くから残っているあの賞金首なのか？」

「『あの』というのが何を指しているのかは分からないが、まあおそらくその通りだろう。

とりあえず場所を移動して話さんか？こんな所で立ち話というのもあれだろう。」

「あ、ああ。それでいい・・・」

男は話を切ると森の方を向いた。

「こっちでよかったかな？

まあいいか・・・よし、ついて来い。」

そういうと男は少女を気にすることなく自分のペースで森の中へと歩いて行った。

「ちょっ、おい！待て貴様！！」

◆

「ここだ。」

森の中を歩いて数時間ほどして、今は少し大きめの木でできた小屋の前にいた。

その小屋は、植物のつるが壁についていたりしたが、人が3人ほど体を休めるのには困らないくらいの大きさをしている。

「まあ、とりあえず入りなさい。
数年あけていたらしいから埃がたまっているところもあるが・・・」

男、ノヴァは小屋の戸をあけながら少女、エヴァンジェリンに向かって言う。

小屋の戸をあけると、中には大きなテーブルとイスが数個、奥の方には物置が見えた。
この小屋のことは先ほどの男たちの知識から知ったのだが、この森を抜けたり、狩りをしたりするときに使う休憩所として使っていたらしい。

「・・・この小屋は？」

警戒しながらエヴァンジェリンが尋ねる。

「先ほど殺した男どもが使っていた場所だ。
使った所で何の問題もないし、危険もない。」

「・・・そうか。」

答えはしたが、エヴァンジェリンは警戒を解くことなく小屋の中へと入っていく。

「何も出すことはできないが、別にいいだろう。
それとも血をお望みかな？」

ノヴァは小屋の中に入って戸を閉めると、テーブルの近くにあった椅子の埃を払って座った。
エヴァンジェリンもそれに習って座る。

「・・・別にいい。」

「はあ。どうでもいいが少し警戒を解いてくれんかね？
別にお前をどうこうするつもりはない。」

エヴァンジェリンの警戒が全く解かれていないのを見て、ため息をつきながら話しかける。
実際、ノヴァも警戒する気持ちはよく分かっている。
だが、する必要のない警戒をして神経をすり減らしていても、無駄に疲れるだけだ。

「・・・なら、お前はこの私をどうするつもりなんだ？」

「別にどうもしない。ただ話がしたいだけだ。

こちらとしては吸血鬼というものにかなり興味が出てきたからな。
」

いまだに警戒を解こうとしないエヴァンジェリンに少しあきれながらも、会話を続ける。本当に自分はこの少女の形をした吸血鬼がどんなことをしてきたのか気になっているだけだ。

「かまわんが、こちらの質問にもしっかり答えてもらうぞ。」

「はいよ。それはもちろんだ。

それで、まず聞くがあんたは何年生きている？」

この質問の答えによって今後取る態度も変わってくる。

吸血鬼はそうなった瞬間から成長が止まると聞いている。この少女が幼い時に吸血鬼となったのは分かるが、今まで生きてきた年数は分からない。

まあ、話し方からして見た目とは違っているのだろうが・・・

「私はそろそろ５０年になるな・・・

そういう貴様は数百年生きたというが、貴様も真祖の吸血鬼なのか？」

「いや、俺は違うよ。もともとが人間とは根本から違っている。

それに実を言うと、数百年を生きたと言ったがそれは俺の意識が

はっきりとしてからのことだ。
　眠っていた時間を合わせたら６０００万年ほど前からこの世界に存在しているよ。」

「・・・は？どういうことだ、しっかり説明しろ！」

俺のことを聞いてさすがに驚いたのかエヴァンジェリンが身を乗り出して聞いてきた。

別に話さないという選択をする必要もないので俺はゆっくりと話し始める。

「俺の体はオラクル細胞というそれ一つで『喰らう』ということを行っていく生命体の集まりで構成されている。この時点で人間とは全く違うことが分かるだろう？」

「あ、ああ・・・」

「続けるぞ・・・

　そしてこの体はもともとこの世界にあったもの『すべてを喰らって再構成する』という目的で造られた。よって、何であってもこの体を容易に破壊することはできない。俺の体が作られたのはさっきも言ったように６０００万年以上前のこと。そして俺の作業によって恐竜など、その時代を支配していた生命体は滅んだ。

　ここまではいいか？」

「・・・納得したわけではないが一応は。」

「では、続ける。

ふつうは再構成をした後に『俺』という存在は消えるんだが、何の因果か知らんが、『俺』は今から数百年前まで眠り続けただけで生存していたんだ。そしてそこからお前たちが知る賞金首『捕食者』としてこの世界で生きてきているのだよ。

これでいいか？」

エヴァンジェリンは納得したわけではないが俺の言ったことは理解してくれたらしい。
首を少し傾けながら何か考えているが・・・

「貴様は・・・」

「ん？」

「貴様はこれまでの数百年間どうやって生きてきたんだ？
同じ不老不死の身の先輩として聞いておきたい。どのように生きていけばいいのかを。」

エヴァンジェリンはこれまでとは違った雰囲気になって聞いてきた。
これまでよほどつらいことがあったのだろう。真剣な表情で、それでいてどこか不安げな様子で聞いている。

だが、だからと言って俺が答えを出せるとは思えないが・・・

「俺は喰らったやつの知識を得ることができる。だからそれを利用して生きてきた。

時に姿を変えて人々に紛れ込んでみたり、自分の体を鍛えたり、各地の戦争に介入したり、しつこく追ってくる賞金稼ぎや自称『立派な魔法使い』ども相手に闘ったり、そいつらの対策としてだれもたどり着けないような拠点を作ったり・・・・・とにかくいろいろなことをやってきたな。

だが、俺が起きた時、すぐ近くに鬼神がいたおかげで、そしてそいつを喰らうことができたおかげで俺は強い状態でこの世界を生き抜くことができた。それに俺は自分の姿かたちを自由に変えれる。

だから、お前の役に立つような話はできねえよ。」

「そうか・・・」

少し残念な様子でエヴァンジェリンは顔を下に向ける。

彼女はこれからも厳しい状況で生きていかなくてはいけないのだろう。５０年を生きたと言っていたし、これから賞金首として名前があがってくるようになるはずだ。そうなると、逃げながら自分を守る力を得なければいけない彼女は自分の身を守りきることができるだろうか・・・

「他に何か聞きたいことはあるか？」

「いや、特にこれといったものはない・・・」

エヴァンジェリンは気の入ってない声で答えるだけで顔をあげない。

「そういえばエヴァンジェリン、お前はどれくらい魔法ができる？」

「そこいらにいる魔法使いどもとそこまで変わらんよ。
逃げながらではうまく習得していけないからな・・・」

「ふむ・・・
ならば、俺が2，3年ほど鍛えてやろうか？そこいらの魔法使いでは敵わん位に。」

「なに？」

俺の提案を聞いてエヴァンジェリンが顔を上げる。

もともと俺には十分すぎるほどの魔法の知識がある。自分では使えないが・・・・・・
そしてそれをそのままにしておくのはもったいないことだと思っていた。
今回はこの知識を生かすいい機会だ。いろいろと試すついでに最高の存在に育て上げてみよう。

「俺には魔法の知識が腐るほどあるからな。

吸血鬼としての力も見てみたいし、お前にその知識をくれてやる。
ただし、2，3年で切りをつける。それからはまた一人でやりたいことがあるからな。」

「・・・・・・」

エヴァンジェリンが黙ってしまった。
少し呆気にとられた表情をしているが、やはり意外なことだったか？

「で、どうする？
お前が嫌ならばそのままにして置くし、干渉もしないが・・・」

「・・・・・・頼む・・・・」

少し考えた後、エヴァンジェリンがポツリとつぶやいた。

「なんだって？」

「クッ・・・頼む。
今の私では少しきつくなってきていたんだ。私に生き延びるための力をくれ・・・」

「よし、わかった。
では、明日から始めようか。今日は奴らに追いかけられて疲れたろう？

みっちりやるから覚悟しておけ。」

ノヴァはにやりと笑いながら席を立った。
窓から外を見てみると空がだんだん暗くなり始めており、日が沈んでいっていることが分かる。

「――――――ああ。」

エヴァンジェリンも立ち上がりながらノヴァの方を見た。
久しぶりの自分以外のヒト（？）がいるこの環境にすでに警戒心はなく、少し顔の表情が緩んでいた。

第十一話（前書き）

遅くなりました。

体調が崩れてパソコンから遠ざかっていたら学校の実力テストでまた近づけず・・・

クオリティに不安はありますが

第十一話です。どうぞ。

第十一話

「――朝か・・・・」

眼を開くと扉の隙間から朝日が差し込んできているのが分かる。
眼をこすりながら体を起こす。
周りを見渡すと近くに金髪の少女が横たわっているのが見えた。
小屋の中に置いてあった毛布にくるまって気持ちよさそうに眠っている。

ああ、そういえば昨日拾ったんだっけ・・・

あくびをしながら体を伸ばす。
そして朝日を浴びようとローブを脱いで扉のもとに向かった。

「・・・・・・ん？何かいるな・・・・・・・」

小屋の周りに数人のヒトの気配がすることに気がついた。
何の用かは知らないが、まっすぐにここに向かっている様なのでここが目的地なのだろう。

軽く警戒しながら扉を開く。
森の木々の間から差し込んできている朝日を体に浴びる。

周りを見渡してみるが、まだ人がやってくる様子は見えない。

「歓迎の準備でもしておくか・・・」

そう呟くと両の手のひらを地面につける。
すると、手をついた部分から地面に黒いナニカが広がっていく。障害物があっても関係なく、水が染み渡っていくように滑らかに大地を侵食していった・・・・・・

◆

「――――――――――いらっしゃい。
こんな森の奥の小屋に何の用かね？」

地面を黒いナニカで覆ってからしばらくして5人のヒトがローブを被ってやってきた。
黒いナニカは地面を覆った後、地面の中に沈み込み、今は土しか見ることはできない。

「こちらに杖や剣を手にした男たちは来ませんでしたか？」

先頭の男がローブから顔を出して話しかけてくる。
他の者たちは周りを気にしてふらふらとしているが特に何かをしてくる様子はない。

「いや、見ていないが・・・
何かあったのかね？」

「たいしたことじゃありません。
私たちはその男たちの狩りの後始末なんですが、全く見つからないのですよ。

・・・・・本当に男たちを見ていないんですね？」

「ああ。」

「それは・・・おかしいですね・・・・・・」

男は顔を少ししかめて下を向き、腕を組みながらブツブツと呟きだ

した。

「（確かにこっちの方にあいつらの魔力の痕跡は向かっていたはずなんだが・・・
術式に狂いがあったか？・・・いや、それでも全く違う方向というのもおかしい・・・
まさか・・・いや、しかしな・・・）」

それが耳に入って気がついた。
そういえばあいつらの魔力消費してねえや・・・
感づかれてるかもしれんが・・・まあいいか。

「そういえば、狩りの後始末と言っていたがそんなに大物なのかね？」

「・・・ああ、いえ。図体がでかいやつではないんですが・・・吸血鬼ですよ。
先に行った者たちが吸血鬼を追い詰めて倒した後、非戦闘員である私たちにその亡骸を受け渡してもらう予定だったのですが・・・・・」

問いかけてみると男は顔をあげて説明しだした。

なるほどな・・・
あいつらは戦闘要員、兼捨て駒として利用されていたのか。

にしても吸血鬼の亡骸ねえ・・・あの小娘って結構な価値があるのかね？
まだまだこれから値があがっていくはずなんだが・・・
まあ、せっかく歓迎の準備をしたんだからちょっとからかってやりますか。

「・・・男たちは見なかったが、金髪の少女ならここを通って行ったぞ。」

その言葉を聞いた瞬間全員の眼の色が変わった。
後ろで杖をいじっていた男が詰め寄って聞いてくる。

「本当か！？本当なんだな！？
そいつはどっちに行ったんだ！？」

「ん？なんだ、あの子が吸血鬼だったのか。」

「ああ、そうだ！
だからどっちに行ったんだ！？速く言ってくれ！！」

詰め寄ってきた男は肩に手を置いて体をゆすりながら問い詰めてくる。
周りにいる男たちもすぐに移動できるように気を張り出した。

「ちょっと落ち着きな。
これじゃあ話せないではないか。」

「あ、ああ・・・で、どっちに行ったんだ!?」

男は手を離したがまだ興奮している。今話したらすぐにでもその方向に飛んでいくだろう。

「その子ならあっちの方へ行ったよ。何か急いでいる感じだったがな。」

「そうか、助かった!
よし、すぐに追いかけるぞ!!」

男たちが来た方向とは逆の方向を指差すと男たちは迷う暇もなく出発しようとした。

「まあ、待ちたまえよ。」

だが、男たちが駆けだそうとした瞬間にそう言って片足を地面に叩きつける。
すると、周りに地面から黒い壁がつき上がってきて小屋の周り数十メートルを覆った。

「なっ！」

「そう急がなくてもいいだろう？
お前たちは今日の朝食となってもらうよ。やはり吸血鬼には人の血が一番だろう。」

「貴様ッ！！何をするっ！！」

にやにやと笑いながらそう言うと男たちはこちらを睨みつけて即座に戦闘態勢をとった。

「攻撃する暇はやらんよ、朝っぱらから汚れたくはないからな。」

「ふざけるな！すぐに殺しｔ」

男たちをなめた言葉を聞くとすぐに切れてわめき始めたが、その言葉が終わる前に口を開いたものは地面から生えてきた黒い口によって飲み込まれた。

「ああ。血まで喰らってしまったらいけなかったな。
次は気をつけることにしよう。」

「なっ！おいっ！！」

特に生かしておくような理由もなかったので残っていた男たちもす

ぐに黒い口の中に放り込まれた。

バタン

小屋の扉が開いて金髪の少女、エヴァンジェリンが飛び出してきた。

「おい、何があった！？」

今の騒ぎの音で起きたのだろう。まだ事情が分かっておらずに混乱しているようだ。
まあ、小屋の周りが黒い壁で覆われ、地面から数個黒いナニカが生えていて混乱しない奴などいないだろうが・・・

「ああ、おはよう。朝食を捕まえた。血を飲むといい。」

面倒くさい説明はせず、ただそう言う。
そして、黒いナニカの一つから人間の腕が一本出てくる。

「なっ、私は今何が起こったかを聞いている。

それと、その腕は何だ！？」

「後で話してやるから今はそれから血を飲め。
鮮度が悪くなってしまうではないか。」

説明がないのは気に食わなかったようだ。
だが、だからと言って話す気はないので食事を勧める。

「くっ、ちゃんと説明しろよ！」

なんだかんだ言っているがそれでも気にしない。とにかくスルーする。

エヴァンジェリンも無駄だと分かったようで腕から血を吸い始めた。

◆

食事が終わった後に今朝のことを軽く説明した。
エヴァンジェリンは「まあ、助かった」的なことを言っていたがちょうどいい朝食だったので気にしない。

黒い壁はまだ周りを覆っている。
魔法の訓練をしていこうと思ったので覆う範囲は広くしたが。

「さて、ではこれからお前を鍛えていこうと思うのだが・・・
まずは基本的に魔法の知識をお前に詰め込んでいくことにする。

それと並行して戦闘訓練も行っていくが、とりあえずはより多くの魔法を習得して、それらの技術を向上させてから俺が相手をすることにする。」

「わかった。
だが、この壁は消さないのか？何かと目立つぞ？」

「これは当分はこのままにしておくよ。

さっき喰らったやつらの魔力で強力な認識阻害をしたからどうにでもなる。」

魔力を自分で作り出すことはできないが喰らったやつの分は自分で使えるようになったからな。
作り出した精密な術式にそれを流せば魔法は使用できるようになっている。

それにこの壁を使ってやりたいこともあるしな・・・

「じゃあ、始めようか・・・・・・」

地面に足をたたきつける。
すると、地面から巨大な何かが出てきた。

ヒト型だが人よりもはるかに大きい。
背中からは腕のような羽が生えており、実際の腕は体の前で組んである。
堂々とした様子で立ち尽くしたアラガミ

シユウがそこに現れた。

「な、なんだこれは！」

「何って・・・魔法を当てる的じゃないか。
今は動かないが練習のときには襲ってくるから気をつけろよ。」

「お前はもう何でもありだな・・・・・・」

「ま、そう思っておけ。
とりあえず一切の容赦はしないからな、がんばれよ。」

捕食者と闇の福音・・・
魔法の教育開始・・・・・・・

第十一話（後書き）

１２００００ｐｖ，１７０００ユニーク到達です。

読んでくださっている方々、ありがとうございます！！

第十二話（前書き）

すいません
間があきすぎました

これからも更新は不定期になると思いますがよろしくお願いします。

第十二話

木が光をさえぎり、薄暗くなっている森の中を人ならざる速度でいくつもの影が動きまわっている。

「チッ、さすがに数が多いな」

その影の一つ、他の影に追いかけられている金髪の少女、エヴァンジェリンは舌打ちをしながら後ろを振り返った。
彼女を追いかけてきているのは2本足で移動している獣のようなもの、尾に特徴的な模様を持っているアラガミ、オウガテイルだ。このアラガミは比較的弱い方なのだが、小型なため小回りがきき、大量な数だといろいろとやっかいになる。
よく見てみると黄色や赤色の類似種、ヴァジュラテイルもいるようだ。こちらは炎を飛ばしてきたり、雷を落としてきたりとオウガテイルよりも少し厄介な存在だ。

「む、『氷楯』」

オウガテイルの一体がエヴァンジェリンの姿をとらえて貫通ニードルを放ってくる。が、着地から飛び上がったばかりで避けづらかったため氷の楯を用いてそれを防ぐ。
数本の針の束はガキッという音を立ててはじかれたが、それに続いて二体のオウガテイルが別々の方から飛びかかってくる。

「少し止まってろ、『氷爆』」

二体の突撃を前方への加速で回避し、魔法を放つ。
エヴァンジェリンは氷の爆発によって距離をとり、森の中をさらに奥へと進んでいく。
魔法を喰らった二体は体の一部が凍りついて若干動きが鈍ったが、すぐにエヴァンジェリンに向けて走り始める。

先ほどからこれと似たようなことの繰り返し。初めのうちは5体くらいだと思っていたが、時間がたつにつれてその程度の数ではないことが分かった。そのため、自分が不利な状況から抜け出すためにこうして移動している。
すでに倒した数体を合わせると数は２０体近くいることになる。いくら小型といえど、ここまで集まっていると厄介だ。

また飛んできた攻撃を避けた所でエヴァンジェリンの前に光が見えた。
自分の目指していた場所までたどり着いたのだと分かり、彼女の口元に笑みが広がる。
そしてアラガミの注目を集めるために『氷爆』を使って大きな音を上げると、彼女は目の前の光に向かって飛び込んで行った。

◆

飛び込んで行った光の先は大きな広場。ここには木が生えていない大きなスペースとなっており、太陽の強い光が地面まで照りつけている。
エヴァンジェリンは広場の中央まで一気に飛んでいき、魔法の詠唱を始めた。

「『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック』」

エヴァンジェリンを追い、森の木々の中から広場に向かってどんどんオウガテイルが飛び出してくる。
だが、エヴァンジェリンはそれを視界に入れながら詠唱を続ける。

「『契約に従い我に従え　氷の女王
来たれ　とこしえのやみ　『えいえんのひょうが』』」

詠唱の間にオウガテイルたちが突っ込んできたが、魔法によって空間ごと温度を絶対零度近くにまで下げられたことにより、その動きが凍りつく。
周りの木々も巻き込んで周囲が氷の世界へと変わっていったのを見ながら、エヴァンジェリンは呪文を紡ぐ。

「『全ての命ある者に等しき死を　其は安らぎなり　『おわるせかい』』」

凍りついた世界が砕けていく。
広場に集められたオウガテイルたちは、一瞬にして氷の棺に閉じ込められ、一瞬にして砕け散っていった。

◆

「ハア、ハア、ハア
これで・・・終わりか」

もう周りに敵がいないことを確認してからエヴァンジェリンは膝をついた。
今彼女が使える最大の呪文『おわるせかい』を放ったばかりのため魔力が尽きてしまっている。これではもう戦うことはおろか、逃げることさえできないだろう。
彼女は膝をついた状態でとりあえず息を整えて体を休めることにした。

「ッ！！」

息を整えていると目の前の地面から黒色の物体がしみ出してきた。
エヴァンジェリンはすぐに今いた場所から離れて状況を窺う。

黒色の物体は一度一か所にまとまって大きな球体となるとすぐに形を変えてゆく。
そして十秒ほどでヒト型へと形を整えてエヴァンジェリンの方を向いた。

「おつかれさま。今日のノルマはこれまでだ。」

ヒト型になった黒い物体、ノヴァはそう言うと自分の懐から黒色の袋を取り出してエヴァンジェリンの方に向けて放り投げた。

「ほら、今日の分の血液だ。しっかり飲んで休んでおけ。」

「・・・分かった。
なあノヴァ、その現れ方はやめろ。心臓に悪い。」

エヴァンジェリンは袋を受け取ると警戒を解いてその袋にかぶりついた。袋からは中に入っている真っ赤な血がしみ出してきて少しずつエヴァンジェリンの口の中へとはいっていく。

「別にいいだろう。ゲートなんて言う魔法を使うやつもいるんだ、少し違うが慣れておけ。」

「良くはないだろ。何故いちいちお前が来るたびに警戒しないといけないんだ！
もっと分かりやすく現れろ！！」

「・・・まあ、いい。
それはそうと、対多数の戦闘もそろそろ及第点でいいだろう。動きはだいぶ良くなったぞ。」

ノヴァがエヴァンジェリンの修行をするようになってから１０カ月ほどが経った。
最初のうちは魔法についての講義だけだったが、２ヶ月くらい経ってからこのような訓練をするようになった。たいていの場合は今回のオウガテイルたちのように何体ものアラガミをまとめて相手にするモノで、たまにシユウやヴァジュラといった大物を相手にしている。始めたばかりのころはオウガテイルにも魔法をはじかれてしまっていたが、今ではまとめて凍らせて砕くといった芸当もできるようになった。（まあ、オラクル細胞の結合はそこまで強くされていないからなのだが・・・）

「ふん、そんなことは当たり前だ。
この程度で私が苦戦するはずがないだろう。」

エヴァンジェリンの態度は前よりも少しでかくなってきたが、ほめ

られたことはうれしいらしく頬が少し赤くなっている。

「まあ何度も言うが、俺たちのような化け物はたいていの場合『一対多数』という不利な状況での戦闘になる。これは経験と状況判断が割と大切だからな、相手が人間でなくともこういう訓練は役に立つ。」

ノヴァの場合はいくら相手の人数がいても大したダメージを喰らわずに相手を全滅させることは楽だった。だが、人間の武器として多数を相手にしてみたとき、自分を持っている『魔剣の主』はうまく立ち回れずに倒れていったものがたくさんいた。普通の攻撃ではダメージを全く受け付けないノヴァと違い、人間やエヴァンジェリンはそれらでも程度は違うが傷を負い、ダメージもたまっていく。経験によってどのように攻撃していくか、相手の攻撃にはどう対処するべきか、という判断は大切になってくる。
エヴァンジェリンはこれまでも多数を相手にすることばかりだっただろうが、これから名が広がっていくとこれまで通りにはいかなくなるだろう。だから今のうちに少しでも実力を上げさせておきたかったのだ。

「対多数の戦闘訓練はこれから数を抑えて強いヒト型を相手にする戦闘を増やしていく。
もう残りの月日も少ないが、俺が直に相手をする日も作るからな。
俺が背中を預けられると思えるくらいには強くなってくれよ？まあ、別に必要ないがな。」

「はっ、ほざいてろ。

私はお前の考えとは比べ物にならないほどの力をつけてやるさ。」

ノヴァはノリで軽く挑発してみるとエヴァンジェリンは見事にそれにのった。

ノヴァはフッと軽く笑って「楽しみにしておくよ」と小さくつぶやくと体を小屋の方に向けて歩き始めた。これからの成長も楽しみにしながら――――――

エヴァンジェリンの相手を始めてから１０カ月――――――

エヴァンジェリンとの別れまであと２カ月――――――

第十二話（後書き）

場所はエヴァンジェリンと会った場所のままです。
一話分が短いかもしれませんが許してください。

第十三話（前書き）

また遅くなりました・・・

第十三話

「『闇の吹雪』！！」

強力な吹雪が漆黒の獣を取り巻いていた雷ごとその巨体を吹き飛ばし、辺りは静寂に包まれた。

吹き飛ばされた黒い獣――ディアウス・ビターは首元のマントの部分がちぎれ、体の至る所をぼろぼろにして地面に横たわっている。

そして、トンッ、という軽い音をたててこの状況を作り出した見た目金髪の少女――エヴァンジェリンは地面に降り立って周りを見渡した。

「終わったぞ、ノヴァ！！
今日の分はこれまでか！？」

近くに何の気配もないことを確認してからエヴァンジェリンはそう

大声を出した。

◆

すると、ディアウスビターのその虎のような巨体がズプズプと音を出して地面に沈んでいき、代わりに黒髪の男――ノヴァが姿を現した。

「ああ、今日はもうこれでいいだろう。

・・・と言いたいところだが、何やらここに大勢のお客さんが来ている様でな。

そろそろやろうと思っていたことをやってしまおうと思う。」

そう言いながらエヴァンジェリンの方へと脚を進める。
その格好はいつもと違い、賞金首として有名になっている灰色のローブを見につけていて少し真面目な雰囲気を纏っていた。

「客？
ああ、そういえば何かたくさんの気配が遠くからこっちに向かっている様な気がするが・・・
何をするつもりなんだ？」

エヴァンジェリンは遠くの方を見て少し顔をしかめるとノヴァの方を向いて尋ねた。

「なに、もうそろそろお前を鍛え始めてから一年が経つのでな。
弟子卒業の祝いとして何かプレゼントでも渡してやろうかとな。」

「・・・もう、そんなに経ったのか。」

「ああ。さすがにずっとお前の面倒を見てやることはできない。
お前も、俺も、また一人に戻る時が来たんだよ。」

「そうか・・・」

エヴァンジェリンは少しつらそうな様子で口をつぐんだ。
一年とはいえ、孤独を感じずに暮らすことができたし、厳しかったが自分に魔法の知識を教え、一人でも十分に身を守れるように鍛えてくれた。

それが唐突になくなり、またもとの独りだけに戻らないといけなくなった。そこには辛いものがあるだろう。

「そうしんみりするな。
俺たちは不老不死だろう？生きていれば嫌でもそのうち会うことになるさ。」

ノヴァはその空気を嫌がって少しは明るくしようとするがそうもいかない。
エヴァンジェリンはうつむいたままで顔を上げない。

「さっさと顔上げろや。『ないぞうはかいだん』ぶっ放すぞ。」

「ッ！？」

一度前に見せた脅威を思い出したのかエヴァンジェリンはバッと顔をあげた。
『ないぞうはかいだん』とは何かに当たるとその当たったモノの内部に向かって幾つにも分離して進んでいき、当たったモノをこれでもかと破壊する鬼畜使用のレーザーである。以前はこれをヴァジュラに向かってぶっ放し、ひき肉の状態にした。

「それでいい。
それでプレゼントだが、最高のものを用意してやった。なんと2つだぞ、喜べ。」

「・・・ああ。」

「ではひとつ目だが・・・これだ。」

笑顔で脅していたノヴァに顔をひきつらせながら反応していたエヴァンジェリンにかまわず、地面に手を向けて目的のものを引きずり出す。

それは二つの赤い玉が付いていたネックレスだった。

「これが・・・？」

「ただのネックレスと思うなよ。
ずっとその状態にしていてもいいが、お前が人形遣いになるならもっと役に立つさ。」

ノヴァはそう言うと指を鳴らした。

すると、そのネックレスの赤い二つの玉は膨張を始めていき、それぞれがノヴァと同じくらいの大きさになると一度動きを止めた。
そして大きくなった二つの玉は形を崩してそれぞれの形へと作り変わっていった。

「おい、こいつは・・・いいのか？」

「ああ、お前に渡したら面白くなるだろうと思ってな。
お前用に少し準備しておいた。最高の”アルダノーヴァ”だ。」

そこにできたのはヒト型の一体とその後ろで力強く構えるもう一体でできているアラガミ――アルダノーヴァ。ヒト型神機とも呼べるそれは、全体がもとのモノよりも少し赤いがそれ以外で差は見られない。

「お前の魔力を通せばこうなるようにしておいた。
戻すときは『去れ（アベアット）』と、アーティファクトのように言ってくれれば戻る。」

「そうか。『去れ』
これは良いものをもらったな。もうひとつも期待していいのだろう？」

「ああ、もちろんだ。こっちも特別製だよ。」

満足そうな顔のエヴァンジェリンに促されて次のものを地面から取り出す。
次に出てきたのは凝った意匠のなされたきれいな短刀だった。

「こいつは俺が作り上げた特別製の短刀で、もちろんオラクル細胞でできている。
こいつの特別なところはこいつを地面に突き刺して魔力を流すことで地表の奥深くに広がっている俺の体に連絡をすることができる

ようにしてある。
　困った時に使うといい、たぶん行くのは俺の分身体だろうが役には立つだろさ。」

「便利なものだな・・・」

「だからといって簡単に使ったりするなよ。
　つまらんことで呼び出したらお前を喰らうかもしれんからな。」

「言われなくてもせんわ！！
　ったく、・・・・・・一応礼は言っておく。ありがとな。」

エヴァンジェリンはノヴァのからかいに反応して怒鳴ったが、その後ほんの小さな声で礼を言った。
ノヴァは素直じゃないなーと思いつつも軽く微笑んで懐から一枚の札を取り出す。

「さて、そろそろお別れの時間だ。
　達者で暮らせよ？」

「ふん、言われずとも堂々と生きていってやろうじゃないか。
　次に会う時を楽しみにしているがいい。」

お互いに笑いながら向き合って最後の言葉を交わす。
そしてノヴァは取り出した転移魔法符をエヴァンジェリンに渡した。

「じゃあな。」

「・・・ああ。」

エヴァンジェリンはそれを受け取り、そして一瞬の後に姿を消した。

◆

「いらっしゃい。ようこそ我が箱庭へ、騎士、そして魔法使いのみなさん。」

周りを見渡すとローブを着こんで杖を構えている魔法使いと鎧を身につけて武器を構えている騎士らしき人々がノヴァを取り囲んでいる。
ありとあらゆる方角から囲まれており、地上はおろか空にも逃げ場はなさそうだ。

「ここにいた吸血鬼はどこに行った！！
お前と共にいたはずだ！！」

「もう一足先に出ていったよ。
それより、いいのかな？そんなことを気にしていても？」

集団の中の一人が大声をあげてエヴァンジェリンのことを聞くがノヴァは飄々と答える。
ノヴァはこの状況を楽しんでいるようで、先ほどから笑みを絶やさない。

「はっ、何を言っている？
さすがの貴様でもこの人数には敵うまい！！」
「さすがにそれは早計だね。
君たちは俺を甘く見すぎだよ。」

脚を地面に叩きつけるとこの集団の収まっている一キロ四方が黒い壁で囲まれた。
壁は空まで覆い、太陽が遮られた大地は暗闇に包まれる。
そして辺りは恐怖を感じた一団のせいでやたらとうるさくなった。
その中でノヴァは声を張り上げる。

「さあ、これより始まるのは神々の晩餐！！
供物は貴様らだ、せいぜい慌てふためけ！！」

天井となった部分が光を発し、辺りに光が戻る。
ちょっとした安堵が一団の中に見えたが、それはすぐに凍りつくことになった。
なぜならば、その場にはいつの間にかこれまでいなかったたくさんの異形の姿があったのだから。
オウガテイル、ザイゴートといった小型のアラガミを始め、シユウ、コンゴウ、グボロ・グボロにヴァジュラ、ボルグ・カムラン、クアドリガ、そしてサリエル、ウロヴォロス、ハンニバルと、さらには

それらの派生形まで数多くのアラガミが大地に君臨している。

「さあ、存分に蹂躙しろ！！
ここらで俺の力を世界に理解させてやろう！！」

そして地獄のような世界が始まった。
この閉じられた箱庭の中を炎が、氷が、雷が飛び交い、人々を屠っていく。
至る所でヒトは食われ、燃やされ、貫かれ、潰され、そして喰われ・・・・・・
攻撃が全く効かないアラガミに対して人々ができることは逃げることしかなかった・・・・・・

◆

「お前が最後の一人か。」

神々の名を冠するアラガミたちの蹂躙は終わり、一人の青年が残った。
その青年のもとまでノヴァは歩きながら近づいていく。

「喜べ、貴様は生き残れるぞ？
俺のことを、そしてこの場のことをしっかりと広めてくれ。
これからここは強者のための試しの場とするからな。」

青年の前に立つと笑みを絶やすことなくそう告げ、青年の頭に一枚の札を張り付けた。
すると一瞬にして青年は姿を消し、辺りはまた静寂に包まれた。

「さて、次は日本か・・・」

◆

青年は気が付いたら近くの町に飛ばされていた。
しばらくの間今までのことが現実として受け入れられなかったが、
やがて青年は立ち上がりあの時あの場で起こったことを話すために
立ち上がった。

そして、ノヴァの賞金はさらに跳ね上がることとなる・・・・・・

また、惨劇が起きた場所にはいまだに黒い壁がそびえ立っているが
強力な認識阻害によって一般には知られていない。
その壁の四方には大きな扉ができており、その前には一本の剣が刺
さり、とある文が刻まれている。

『強者よ、剣を持ちて扉を開け。
先に待ちうけるは神の名を冠せし獣”アラガミ”
倒せば己の望む最高の武具が与えられるだろう。

されど覚悟せよ。
戦う意思なき者には死があるのみ。
半端な力、半端な意志では死に至るのみ。

そしてそれは武具も同じ。
意志を持ちしこの武具は認めぬものは喰らい尽くし、
認めた者にのみ最高の力を与えよう。

さあ、挑むがいい
神々は汝を待っている。

』

後にこの場所は世界各地で見つかることになる――――――――――

第十三話（後書き）

あと2，3話ぐらいで大戦期に入れると思います。
変わらず更新は不定期ですが、感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5652p/

世界を喰らって

2011年7月8日23時19分発行